

大阪の生物多様性をまもる

生物多様性条約第10回締結国会議(COP10)が、10月に名古屋市で開催されたことで、「生物多様性」という言葉を耳にすることが多くなりました。生物多様性とは何でしょうか？生物多様性をまもるとはどのようなことでしょうか？また、なぜまもる必要があるのでしょうか？

生物多様性とは

それぞれの生物は、その地域にくらす他の生物との関係や歴史の中で生まれ、遺伝的に独特な存在へと進化してきました。生物多様性とは、そのような地域的・歴史的・遺伝的な豊かさのことです。たとえば、市内を流れる淀川は、日本で最も淡水魚の種が豊かな川です。この豊かさ＝多様性は、琵琶湖淀川水系という地域とその歴史に生まれたものです。



在来生物のオナノミ（ひつつきむしの1種）。既に大阪府から絶滅したと考えられています。



外来生物のカダヤシ。かつて日本中に放流されましたが、現在では法律で飼育や放流が禁止されています。

生物多様性をまもる理由

豊かで健康な生活に欠かすことができない食品や医薬品も、ほとんどは野生生物に由来しています。また、私たちが引き継ぐ多様な文化も、多様な生物・環境に育まれてきたものです。生物多様性をまもることは、私たちの暮らしをまもることにつながります。

生物多様性への脅威と保全

現在、生物多様性は様々な脅威にさらされています。たとえば、外国から持ち込まれた外来生物や、生息地の破壊などです。しかし、緑地の整備などにより、一時期よりもみどりは増えています。また、南港野鳥園など世界に誇る環境回復の実績もあります。環境科学研究所では、生物多様性を効果的に保全する手法の開発など、生物多様性をまもるための研究も行っています。



(都市環境担当 高倉 耕一)